今月の
トップランナー
Vol.15

平松礼二

「池に金色の雲映る」2011年　80.3×116.7cm

フランス・ジヴェルニーの印象派美術館で７月13日から10月31日まで、
「睡蓮の池～平松礼二、モネへのオマージュ」展が開催される。
この展覧会はフランス側が企画・主催するもので、
ここに出品される屏風を含む約25点の平松の新作はすべて、同館の所蔵品となる。
この展覧会は、「第２回ノルマンディー印象派フェスティバル」の核となる
6つの特別展の内のひとつで、「水」という共通テーマのもと開催される。
ヨーロッパ圏での巡回展は検討されているが、帰朝展はおそらくない。
フランス行きを目前に控えた作品群を前に、画家に現在の胸中を取材した。

「色彩のカルテット―睡蓮」2011年　180×420cm　六曲一隻屏風

「冬の池・ジヴェルニー」2011年　80.3×116.7cm

1997年7月、ジヴェルニー、モネの池のほとりにて

右：ジヴェルニー印象派美術館館長、D.カンディール氏
左：美術館外観

「夕映えの池―睡蓮序曲」2011年　180×420cm　六曲一隻屏風

平松礼二の「印象派・ジャポニスムへの旅」の成果

画業約50年を迎えようとしている日本画家・平松礼二は、長く「路―みち」というテーマで作品を発表してきた。「路」を辿る旅は日本から始まり、朝鮮半島、中国、インドシナ半島、インド、ニューヨークにまで範囲を広め、その延長にフランス印象派の旅があった。印象派と言っても、とりわけモネの足跡を辿る旅である。ジヴェルニーの庭を中心とするモネゆかりの土地を何度も訪れて取材し、膨大なスケッチをもとにタブローを描いた。それらは1999年から2000年にかけ開催された、全国巡回した展覧会「日本画家の視線　印象派・ジャポニスムへの旅　平松礼二」展で発表された。

そもそもなぜ平松礼二は、印象派、とりわけモネをそれほど意識するようになったのか――。

そのきっかけは 平松が50歳を過ぎ、初めて訪れたパリのオランジュリー美術館でモネの「睡蓮」を見たことだった。楕円形のギャラリーの壁に沿って描かれた、あの長大な睡蓮の作品である。

「これはまるで障壁画ではないか、と思って感動しました。身近ではあったけれど興味が薄かったモネの絵が、どんどん自分の胸の中に染みこんできたんです。モネが池に睡蓮を浮かべたのはなぜだろう。モネが池に映る雲や空を描きたかったのはなぜだろう。そんな風に、いろんな疑問が湧いてきて、追求したくなりました。そして、モネの胸を借りて日本画の可能性を追求する旅にでようと思い立ったのです」

即行動派の平松だ。それからというもの、10年近くモネに関連する土地を巡り、制作を通じてさまざまな考察を重ねた。

「ジヴェルニーの池は見ると水深がわりと浅くて、水が澄んでいるので、空も雲も樹木もきれいに映し出すんです。つまり、モネは自分の庭に水鏡をつくりだしたんでしょう。それは浮世絵に出てくる湯女が手鏡を持っているのを見て、発想したことじゃないか。ちょうどモネの池の形と一致するんですね、湯女の手鏡の形が……。戸外で実際の風景を描いたのが印象派だとしたら、水鏡に映ったイメージを追求したモネの絵は、当時のフランス絵画のなかでも画期的だったと思います」

学者には思いつかない、画家ならではの視点である。

こよなく愛する若冲や北斎に匹敵するほどの描きたがり屋の平松礼二。印象派シリーズだけでも、1000点近い作品を描いている。それを1年かけて巡回させる発想のダイナミックさやヴァイタリティは、当時の日本画壇でも突出したものだった。また当時の平松はこのような一大プロジェクトに取り組みながら、多摩美術大学では教鞭もとっていた。さらには2000年の正月号からは、『文藝春秋』の表紙絵も担当している（以後、11年間担当）。MOA岡田茂吉賞大賞を受賞したのも、2000年のことだった。

こうして平松礼二の21世紀は華々しくスタートしたが、ここ10年あまりの間は、とくに新しいシリーズを発表することなく、美術マーケットの第一線からも遠ざかったように思えた。放電した後の充電期に入ったような印象があった。

それだけに、今回のジヴェルニー印象派美術館での個展開催のニュースは、インパクトが強い。本人も最初は信じられなかったそうだ。

「ある日とつぜん連絡が入り、テラ・アメリカン・アート財団（ジヴェルニー印象派美術館の前身）の方とフランスのジヴェルニー美術館の館長がアトリエに絵を見に来たいと言うんです。騙されているんじゃないかと思って、耳を疑いました（笑）。でも、実際にアトリエにいらして、とても丁寧に私の絵を見てくださった。画集や資料を送るよう言われ、何度も手配しました。慎重に検討して頂いた結果、こんどの展覧会が決まったのです」

そして昨年9月、名古屋市美術館での回顧展の期間中に来日したジヴェルニー美術館のD・カンディール館長との間で正式に美術館主催による展覧会開催の契約が交わされた。

なぜ平松礼二か――。

今回の個展を包括する「ノルマンディー印象派フェスティバル」は

「ノルマンディ　夢の季（Ⅱ）」2012年　100号P

2010年の第1回展、100万人の入場者数を記録した大イベントだ。

今年も、4月下旬から各地で特別展が開かれる。そのラインナップを挙げると、「反射する色―水面の印象派」「モネの断崖、もうひとつの連作」（ともにルーアン美術館）、「水辺の夏：レジャーと印象派」（カン美術館）、「港におけるピサロ～ルーアン、ディエップ、ル・アーヴルにて」（アンドレ・マルロー美術館）、「シニャック、色彩と水」（ジヴェルニー印象派美術館）という豪華な内容だ。

本格的な印象派の祭典で日本画家・平松礼二が招聘されることは、まさに日本人としての快挙である。印象派ゆかりの地を描いた日本人画家が大勢いるなかで、平松が選ばれたのはなぜか。

「なんとなく思わせぶりな絵、というのは嫌なんです。〝余白の美〟だとか、〝侘び・寂び〟なんていうのも、自分の体質に合わない。はっきりした形と鮮やかな色彩で空間を埋め尽くしたいという欲求が強いんです。空間恐怖症かと思うくらい（笑）」

平松絵画の特徴とも言える過剰性は、フランス人の感覚に新鮮なインパクトを与えたに違いない。しかもその過剰性は単純な装飾性にとどまらず、豊穣なる生命のイメージを喚起する。そしてその先には、命あるものが滅んでから帰って行く黄泉の国のイメージを内包する。生のイメージを描きながら死のイメージを喚起する宗教観こそ日本人独自のものであり、ヨーロッパ人にとって衝撃的なものだろう。

日本美術史家で平松とも親交のある辻惟雄氏の説によると、日本美術の特徴は「装飾、アニミズム、遊び心」の3点に絞れるのだという。

ディテールまでしっかりと描く平松は、対象との不思議な一体感をもって描いている。それは伊藤若冲などとも相通ずる感性だ。その一体感こそ、アニミズムの表れと言えるだろう。その精神は遊び心を呼び、たとえばモネの池の畔に蛙やトンボを自由に遊ばせる。

平松作品の装飾的絵画性が日本美術の本質的思想を内包し、エンタテインメント性を孕んでいるからこそ、今回のフランス招聘の機会を得たのだろう。

閉塞感を否めない日本画の世界と海外とを繋ぐ「路」を、今回の平松礼二展が切り開くことを祈りたい。

（編集部）

Infomation

「睡蓮の池～平松礼二、モネへのオマージュ」展

7月13日～10月31日

ジヴェルニー・印象派美術館

【ひらまつ・れいじ】1941年東京都生まれ。愛知県で育ち現在鎌倉市在住。師・川端龍子。〈賞〉創画会賞、中日大賞、東京セントラル美術館日本画大賞展優秀賞、山種美術館賞展大賞、MOA美術館岡田茂吉賞優秀賞・大賞、中日文化賞他。横の会、日本秀作美術展他出品、個展多数。94～2005年多摩美大教授を務める。00年より「文藝春秋」表紙画を担当（現在に至る）。